

さらなる国際化のために

日本オペレーションズ・リサーチ学会 副会長
首都大学東京 教授 室田 一雄



皆さま、明けましておめでとうございます。本年もどうぞよろしくお願ひいたします。ご挨拶の機会をいただきましたので、学会の国際化に関連することを思いつくまま述べてさせていただきます。

* * *

昨年の夏に、第22回の国際数理計画シンポジウム (International Symposium on Mathematical Programming (ISMP)) がアメリカのピッツバーグで開催されました。ご存じの方も多いと思いますが、このシンポジウムは3年に一度開かれる最適化分野で最も大規模で重要なイベントで、アメリカに拠点を置く数理最適化学会の主催です。学会の名称は、数年前に、数理計画学会 (Mathematical Programming Society (MPS)) から数理最適化学会 (Mathematical Optimization Society (MOS)) に変わったのですが、シンポジウムの正式名称には「数理計画」の言葉を残しています。

今回のISMPではとても嬉しいニュースがありました。『オペレーションズ・リサーチ』(2015年12月号)の学会ニュースにもありましたように、南山大学の福島雅夫先生がPaul Y. Tseng Memorial Lectureship in Continuous Optimizationを受賞されました。この賞は、数理最適化学会 (MOS) の六つの大きな賞の一つで、連続最適化の分野で顕著な研究業績をあげるとともにアジア太平洋地域における研究普及に貢献した研究者個人に授与されるものです。Pacific Optimization Research Activity Groupの設立や、Pacific Journal of Optimizationの編集などの福島先生の貢献が認められ世界に発信されたことは、大変喜ばしいことです。福島先生の記念講演を拝聴し、その学問的な内容に感服するとともに、講演会場に溢れる和やかな雰囲気にも国際的リーダーシップの有り様を教えていただいたような気がいたしました。

若い人たちがISMPに大勢参加して、立派に発表を

していました。これも心強いことです。通常の講演では30分程度を英語で話し通すことになるわけで、これはかなりの重圧のはずです。しかし、いまの若い人たちは、この重圧を感じないのか跳ね返しているのかわかりませんが、涼しい顔をして発表をこなしています。しかも英語は昔の若い人に比べて格段にうまくなっていて、発表内容が聴衆に通じるレベルに達しています。日常生活でほとんど英語を使わないのに不思議に思えますが、努力の賜物ということなのかもしれません。

もちろん課題がない訳ではなくて、やはり、質疑応答の技術を磨く必要があるように感じます。これは単に英語という言葉の問題ではなくて、広い意味のコミュニケーション能力の問題です。その背景には (大袈裟に言えば) 異分野や異文化に対する知識・理解・姿勢のようなものが関係しているような気もいたします。これについては、学会として何かできることがあるのか、あるいは、何かすべきなのかなど、何かの機会に考えてみてもよいかもしれません。あまり風呂敷を広げると取捨がつかなくなりますが、国際化の基礎力を高めるための地道な努力が必要ではないでしょうか。

私自身にとっても今回のISMPは実り多いものでした。離散凸解析のセッションをオーガナイズしたことによって、いままでe-mailだけで研究交流をしてきた研究者と有意義な時間をもてたように感じております。やはり、研究交流にはリアルな出会いが必要であり、国際的な認知には物理的なプレゼンスが重要であることを改めて痛感した次第です。ただ、物理的なプレゼンスを実現するためには渡航費が必要です。近年、各種の研究費が競争的資金として配分されるようになり、その結果、一部の強力な研究グループに研究費が集中することとなっています。しかし、いずれの集団

にも与することなく、独自の世界を模索して闘志を燃やす一匹狼の研究者もいるはずです。学会として、そのような研究者を探し出して支援することができたら素晴らしいと思います。

* * *

海外で開催されるシンポジウムへの参加は最も基本的な国際研究活動の形態です。かつては、日本の学会から組織的に参加者を派遣するようなこともあったと聞いておりますが、いまでは、研究者がそれぞれの自由意志で参加していて、結果的に学会の国際化がもたらされています。これに対して、より組織的な準備と対応を求められるのが学会の招致です。国際学会を開催するためには大きな労力を要しますが、そのようなイベントを成功させることによって、国際的なプレゼンスは格段に向上します。

数理最適化学会（MOS）では、ISMPとは別に、二つの大きな国際研究集会を定期的に行っています。一つは、整数計画法と組合せ最適化の会議（Conference on Integer Programming and Combinatorial Optimization (IPCO)）であり、もう一つは連続最適化の会議（International Conference on Continuous Optimization (ICCOPT)）です。ICCOPTは連続最適化に関する世界最大の国際会議ですが、その第5回の会議が東京工業大学の水野真治先生を組織委員長として今年（2016年）の8月に東京で開催されることとなっております。日本で開催される最適化の国際会議としては、1988年に東京で開催された第13回のISMP以来、28年ぶりの大きな国際会議です。世界50カ国以上から連続最適化に関する幅広い研究者と実務者が450名以上参加することが見込まれており、準備が着々と進められている状況です。日本OR学会としまして、これを創立60周年記念事業の一つとして位置づけ、共催という形で財政的にもサポートしております。OR学会側のメリットも大きく、この会議の開催を通じて、日本OR学会の存在を国際的にアピールする絶好の機会が得られたこととなります。ICCOPT2016の組織

委員会のご尽力に感謝の意を表するとともに、OR学会員の皆様におかれましても、ICCOPTに積極的にご参加いただき、日本のORの底力を発信していただきますようお願い申し上げます。

* * *

国際化を推進するために学会としてできることは、連携協定などの枠組みの整備などになろうかと思いますが、国際化の実質を支えるのは、結局のところ学会メンバー個人の力ということになります。

そもそも、世界スケールで活躍する研究者にはどのような力が必要なのでしょう。研究業績があって、研究発表がうまくて、いろいろな要職を歴任し、社会的なルールとマナーを身に付けていて……というだけでは足りないようです。ほとんどトートロジーになってしまいますが、国際的に活躍するには国際人としての魅力が必要なのではないでしょうか。

では、そのような人材はどのようにしたら育成できるのでしょうか。「国際人としての魅力」とは何でしょうか。このように考えていくと、どんどんと悩みが深まります。「国際人としての魅力」を習得する秘策があろうはずありません。

『オペレーションズ・リサーチ』の2015年11月号は、学会が国際化に向けて協定締結以外にもできることがあることを鮮やかに見せてくれました。特集「海外へ行こう！」です。その記事には、海外での生活経験を通じて「国際人としての魅力」を身に付けていく過程が描き出されています。間接的な方法ではありますが、このようなメッセージを発信することによって学会の国際化を推進できたのです。OR学会のさらなる国際化のためには、若い国際的リーダが是非とも必要です。この特集号に触発されて世界に挑戦する若い人が数多く現れることを願っております。

* * *

最後に、本年が会員各位にとって実り多い年であることを祈念して、新年のご挨拶とさせていただきます。